

至七・五フロリンであるが之以上の大きな石になると一カラットについて十乃至十五フロリンが一般であるが大なる物を磨いて成功すれば賞與を與へられることになつてゐる。

この地方の磨場の主な目的は、出来るかぎり大きい石を得ること、これがためには石の光輝を犠牲にする併し歐洲では、石の重さよりも光輝、閃光に重きを置いてゐるため磨いた石は歐洲と東洋の原産地とに於ては、その値に餘程の相違を生じてくる。即ち、歐洲では、原産地の琢磨によつて却つて石が損せられると考へられてゐるが東洋に於てはそれでよい價になる。

爪哇の砂糖

爪哇が極東に於ける最大の砂糖生産地であり世界に於ても又最も重要な生産地である事は

以前は、^{キヅ}牛地のケーブ金剛石もこゝで琢磨されて、極東の市場に於てマルタボエラのものよりも廉價で、賣れ行きが盛であつた。富裕な支那人、マライ人、及びジャバ人は寶玉を贅澤に見せびらかすといふことを、法外に好む民族で金剛石を時計の鎖に嵌めたり、大きな氣障^{キヅ}な飾釦を付けた、頸飾といふよりも寧ろ胸當の様な垂飾りを婦人に着けさせたりして喜んでゐる。そして之をすべての會合、其他あらゆる機會に着けて出る、これ等の裝飾を購ふことは彼等にとつては一種の投資と考へられてゐるのである

(Mining Mag. July, 1923)

シヤシヌウ

周知の事實である、次の數字は最近二十年間に於ける爪哇砂糖の生産の進歩を示すものである

年 度	耕作面積(畝)	全産額 英噸	噸に付産額 (英 磅)
一九〇〇	二二四三〇〇	七三三五〇〇	七三八〇
一九一〇	二二六〇〇〇	一二五四六〇〇	九〇三四
一九二〇	三八五七〇〇	一五一三〇〇〇	八八三四

十九世紀の終り爪哇は輸出用の生糖と、地方的需要の爲めに少量の精糖としか製造しなかつた。一九〇三年、一〇〇〇噸の白糖が英領印度に輸出せられ而も販路容易であつたので爪哇の製糖業者は精糖の生産を増加せしむる目的を以て製糖機械を完成する事に努力した。香港との競争に勝利を占めた後爪哇の輸出者は今日迄印度への主なる供給者となりモウリス島と共に印度の市場に勢力を有して居る。其の他爪哇は多量の白糖を日本、新嘉坡、香港、濠洲等に輸出し又生糖及び糖蜜を歐羅巴各國へ輸出する。

近年輸出せられた量は次の如くである。

年 度	最上白糖	生 糖	糖蜜(米突噸)
一九一五……	一四二四九〇	六二五四六	一六五六九六
一九一八……	一五〇四四八〇	三三九七五	三四一一〇
一九一九……	一八四一七三	一九九六九	一三二六九七
一九二〇……	一四八三二二三	二一六四三	一七八一五三

此の數字は爪哇の製糖業に關する最近の一研究 (K. R. F. Blokzeijl, The Java sugar industry, The far Eastern Review, XVIII, No 5, Mai 1922, p. 278—282) から引用したものである。著者は砂糖の生産に依て爪哇の經濟生活は次第に其の位置を高めつゝあると主張して居るが尤もな論である。一九二〇年に於ける爪哇製糖業の狀況を窺ふに此の年に於ける工場數は一八三を算し被傭歐羅巴人は三千人に達し、其の他土人の勞働者は多數に達した。此の製糖業は砂糖の耕作者たる數百千の爪哇人に多額の給料を分配し最後に此の植民地の鐵道及び電車に著しい活動の要素を與へる。

爪哇に於ける製糖業の繁榮は主として投資の豊富な事と科學的研究の實驗室の多い事と工場機械に加へられた不斷の改良とに負ふ所である。斯かる専門的技術的の方面は今暫く述べないが爪哇製糖業の繁榮は又甘蔗栽培の組織にも負ふ所であつて此れが調査は眞の地理學的興味を喚起する次第である。

砂糖蔗は成育期間中非常に雨量の多い季節を要求し、收穫の时分には乾燥な時期を要求する。爪哇の氣候は東方の季節風によつて乾燥な季節を有する、此の乾燥な季節は東方に至るに従ひ益々著しく規則正しい、其れ故、甘蔗の耕地及工場の大部分はツデマナツク河の東方なる爪哇の東部地方及中部地方の平原に位置して居る。

甘蔗は成熟期に達する迄に十二箇月以上を要し、其の耕作は三年目毎より早く同一の耕地で行ふ事が出来ない、爪哇では種々の輪作を行つて居る、此の輪作は大體次の如き型式に近いものである。

第一年 五月より十月迄 前年植付けられた甘蔗の收穫 十月十一月 甘蔗の刈取られた直後蒔かれた大豆或は玉蜀黍の收穫 十一月より四月迄 米

第二年 四月より十一月迄 印度藍、煙草、隱元豆、其他 十一月より四月迄 米

第三年 四月より第四年の五月―十月 甘蔗の耕作

甘蔗の收穫と收穫との間に行はれる此等種々の耕作は何等歐羅巴栽培人の干渉なく全く土人の發意によつて行はれる。

(ラ、セオグラフィー、一九三三年、第十五卷、第一號(小牧))

水星日面經過

本年五月八日に見らる、水星の日面經過は左の如くである、當日、太陽の視半徑は十五分五十秒五で水星の視半徑は僅に六秒にすぎない、注意すれば煙ガスラと双眼鏡を用ひて見られぬことばあるまい、凡午前十時頃に太陽面の中心に一小黒點を見出すであらう、それが即ち水星である、今各地の初觸、中心、終觸の時刻を記す。

地名	初觸(外)	兩中心の最近	終觸(外)
長崎	午前八時九分	午前八時十七分	午後二時十七分
京都	六時四十八分	六時五十五分	二時七、五
東京	六時四十八分	六時五十五分	二時七、五
札幌	六時四十八分	六時五十五分	二時七、五